ロシアの公式言説における反西側主義の展開*

溝口修平（法政大学）

はじめに

ロシアによるウクライナ侵攻が起こって以来、ロシアのプーチン大統領への注目はこれまで以上に増している。それは、ロシアの権威主義体制が個人化（personalize）し、意思決定におけるプーチン大統領の役割が増しているために、プーチン個人の思想や世界観がこの戦争に強く影響しているという前提に基づいている(Suslov 2024)。もちろん、それだけでこの戦争の原因が説明できるわけではないのは言うまでもない。しかし、現在の政治体制において圧倒的な権力を持つプーチンの意思が、ロシアによるウクライナ侵攻を説明する 1 つの要因であることは間違いないだろう。

本稿は、このような問題意識に基づいて、ロシアの大統領の言説変化を分析するものである。その中でも本稿が特に注目するのは、反西側主義（anti-Westernism）がいかに形成されたかという問題である[1]。なぜなら、プーチンをはじめとするロシアの高官は、この戦争を「ウクライナとの戦争」というよりも、「ウクライナの背後にいる西側諸国との戦争」と位置付けているからである。例えば、プーチンは開戦直前の 2022 年 2 月 21 日に行った演説において、ウクライナ政府は西側諸国に操られており、その政府が西側寄りの政策をとることによ

---

* 本稿は、Mizoguchi, Shuhei. 2026. “The Making of an Adversary: Anti-Westernism in Russia’s Normative and Geopolitical Narratives.” *Post-Soviet Affairs* 0(0): 1–23. doi:10.1080/1060586X.2026.2649945. を下地にして執筆したものである。ただし、日本語に直すにあたり、内容・構成を若干変更した。また、本研究は、23KK0243, 22H00053, 21K01306 の助成を受けたものである。

[1] 「反西側主義」という言葉は日本語ではあまり耳慣れず、anti-Westernism の訳語としては「反欧米主義」や「反西洋主義」といった用語の方が一般的かもしれない。しかし、現在のロシアにおける anti-Westernism は、「西側」という冷戦によって生み出された概念を引きずったものであること、その敵意が向けられる範囲は必ずしも明確ではなく、欧米諸国を中心とする漠然とした「西側」への批判であることなどを考慮して、本稿ではあえて「反西側主義」という概念を用いることにする。

って政権を構成するオリガルヒは富を溜め込む一方で、国民は困窮する羽目に陥っていると主張した（Путин 2022）。このような主張は開戦後もことあるごとに繰り返されている。

また、こうした見方は、ロシア指導部だけでなく、ロシア国民にもある程度受け入れられている。ロシアの世論調査機関レヴァダ・センターによれば、ウクライナでの死者や負傷者の責任の所在を問う質問に対し、責任がウクライナにあると回答した人が 2022 年 4 月に 17%（24 年 6 月では 11%、以下カッコ内の数値は同様）、ロシアと回答した人が 7%（6%）であったのに対し、米国と NATO 諸国と回答した人は 57%（65%）にのぼった(Левада-Центр 2024)。この結果は、ロシア政府が繰り返してきた反西側的言説が国民にも浸透していることを示している。

それでは、このような反西側的な言説は、いつ頃からどのように発展してきたのだろうか。本稿では反西側主義を、「西側」の価値観、制度、影響力がロシアのアイデンティティ、主権そして安全保障上の脅威となると考える政治的立場と定義する。このような考えが、ウクライナ侵攻開始後に生まれたものではなく、以前からロシアの政治エリートによって繰り返されてきたものであることは間違いない。しかし、それがどのようなプロセスを経て発展し、過激化していったかについて、実証的な検討は行われていない。本稿では、2000 年から 2024 年までの大統領年次教書演説を量的・質的に分析することで、その変容過程を明らかにする。

本稿の主張を先取りして述べると以下のようになる。まず、反西側主義には 2 つの側面がある。ひとつは、価値観やアイデンティティに関わる規範的側面であり、もうひとつは国際秩序や国家間の勢力関係に関わる地政学的側面である。この 2 つの側面がどのように変化したかをたどると、長らく両者はそれぞれ独立して展開していた。しかし、2014 年のユーロマイダン革命とクリミア併合を経て、両者は結びつきを強め、より過激化していった。ロシアの独自性を強調する言説自体は以前から大統領の言説の中に存在していた。ただし当初、それは必ずしも西側の価値観や政策そのものを否定するものではなかった。しかし、国内外の出来事を経る中で西側に敵対的な言説が徐々に蓄積し、2014 年を境に大きく変化したのである。

以下では、まず次節で先行研究において反西側主義がどのように論じられてきたかを整理する。そのうえで、本稿の分析手法と使用するデータを紹介する。第 3 節では、反西側主義を実際に分析できる形に整理・定義し、第 4 節と第 5 節では量的分析と質的分析を行う。

1. プーチン大統領の 2 つのイメージ

2000 年にプーチンが大統領に就任してからしばらくの間、彼の外交政策は「現実主義的」「プラグマティック」なものだと説明されることが多かった(Casier 2006; Galeotti 2019; Tsygankov 2007)。たとえば、ツィガンコフは 2000 年代半ばからロシアの外交政策が強硬なものになったとしつつも、その基本姿勢は依然としてプラグマティズムに基づいていたと評価している(Tsygankov 2007)。しかし近年、特にウクライナ侵攻開始以降は、プーチンを帝国主義的・拡張主義的な指導者とみなす見方が強まっており、「プーチンは長年にわたり西側との戦争を続けてきた」といった評価も見られる(Bellamy 2023, 6–7)。このような評価の違いは、とりわけ時評的な領域でますます拡大傾向にあるように思われる。

もっとも、ロシア外交に関する多くの研究は、ロシアが徐々に反西側主義的な態度を強めてきたという認識で一致している(Götz 2017; Tsygankov 2019a)。つまり、プーチンが初めから反西側的な外交路線をとっていたわけではなく、その姿勢は時間をかけて変化してきたと考えられている。ただし、その転機をどこに求めるかについては見解が分かれている。一部の論者は、プーチンがミュンヘン安全保障会議で米国中心の国際秩序を批判し、ジョージアとの戦争を行った 2007 年から 08 年をその転機とみなしている(Ambrosio and Vandrovec 2013; Linde 2016)。他方で、2012 年にプーチンが大規模な反政府運動に直面しながら大統領に復帰したことを、より重要な転機だと考える研究もある。2000 年代のプーチン政権は、国民の生活水準向上を通じて支持を獲得してきた。しかし、経済成長の鈍化と大規模な反政府運動の中で始まった第二次政権は非常に不安定であった。そこで、プーチンはロシアの伝統や愛国主義といった価値観を動員することで、この危機を乗り越えようとした(Light 2015; Sharafutdinova 2020; Tsygankov 2016; Tsygankov 2019b)。そのため、多くの研究者はこの時期をプーチンの「保守的転回（conservative turn）」や「イデオロギー的転回（ideological turn）」と呼んでいる。そして、愛国主義や伝統的価値観が強調される中で、反西側主義も強まったと考えられている(Feldmann and Mazepus 2018; Hutcheson and Petersson 2016; Laruelle 2013; Robinson 2017; Snegovaya and McGlynn 2025)。

このように、反西側主義は近年のロシア外交を特徴づける重要な要素であり、プーチン体制を支える基盤の 1 つだとも考えられてきた(Kortukov and Waller 2024; Laqueur 2015, 120; Snegovaya, Kimmage, and McGlynn 2023; Taylor 2018, 20–21) 。しかし、この「反西側主義」が具体的に何を意味するかは、これまで必ずしも明確に定義されてこなかった。そのため、論者

によってこの概念が意味する内容が異なり、おおまかなイメージは共有されているものの、分析概念として十分に整理されているとは言い難い。

2. 分析の方法とデータ

そこで、本稿では以下の手続きをとることで、ロシアの公式言説における反西側主義の変化を分析する。第一に、反西側主義という概念を分析可能な形で定義する。本稿ではこの概念を、「西側」の価値観、制度、影響力がロシアのアイデンティティ、主権そして安全保障上の脅威となると考える政治的立場と定義する。そして、この政治的立場は、価値やアイデンティティに関わる規範的側面と、国際秩序や安全保障に関わる地政学的側面という 2 つの側面から成り立っていると考える。第二に、先行研究に基づいてこの 2 つの側面に関連するキーワードを抽出し、それらの語が、毎年行われる大統領教書演説の中でどの程度用いられているかを定量的に明らかにする。そして、第三に、これらのキーワードがどのような文脈でどのような意味を持って用いられているかを定性的に検討する。このように、本稿では量的分析と質的分析を組み合わせる形で、反西側主義の変化を多面的に明らかにする[2]。

主要な分析対象としたのは、2000 年から 2024 年までの大統領の年次議会教書演説である。この期間は、第一次プーチン政権（2000-08）、メドヴェージェフ政権（2008-12）、そして第二次プーチン政権（2012-24）にあたる。この間に、2017 年、2022 年を除く 23 回の演説が行われた。大統領教書演説は、大統領がこれまでの政策の成果、現在の課題、そして今後のヴィジョンを国内外に向けて発信する重要な機会であり、ロシアの公式言説が長期的にいかに変化してきたかを分析する上で格好の素材である。バルダイ会議、サンクトペテルブルク国際経済フォーラムなど、大統領が国際的に自身の立場をアピールする機会は他にも存在するが、いずれも大統領が定期的に参加するようになったのは 2000 年代半ば以降であるため、大統領教書演説を主要な分析対象として選択した。

---

[2] 定量分析にはロシア大統領府が提供する英語翻訳版を利用した。これは、ロシア語よりも英語の方がテキスト処理を行う環境が整っているためである。一方、質的分析では原文のロシア語テキストを参照した。

大統領教書演説は、年によってその長さ、そして外交・安全保障政策に割かれる割合もさまざまである[3]。その分布を表 1 にまとめた。平均すると、大統領は演説全体の約 20%を外交・安全保障政策に割いているが、年によってその違いは大きい。その割合が最も少なかった 2000 年には、プーチンは演説全体の約 5%しか外交問題に触れていない。逆にウクライナ侵攻後初めて行った 2023 年の大統領教書演説では、外交・安全保障問題が全体の 6 割以上を占めた。

表 1　大統領教書演説の概要

	演説全体の単語数	外交政策の単語数	外交政策の占める割合
最小値	6,683	339	4.95%
中央値	9,215	1,444	15.83%
平均値	9,662	1,980	19.46%
最大値	15,550	8,334	62.94%

図 1 は、各年の大統領教書演説における外交・安全保障問題の占める比率を表したものである。一見してわかるように、2008 年（ロシア・ジョージア戦争、世界金融危機）、2014 年（ユーロマイダン革命、クリミア併合、ドンバス紛争）、2023 年（ウクライナ侵攻後の最初の演説）のように、ロシアが武力行使を行った直後には、その比率が大きく上昇していることがわかる。また、2018 年の演説でもプーチンは動画も用いてロシアの最新兵器開発をアピールし、外交・安全保障問題の占める比率が 3 割を超えた。

大統領任期ごとにもいくつかの特徴を見出すことができる。第一次プーチン政権（2000-08）では、外交・安全保障問題の占める比率は比較的安定していた。プーチンは毎年演説の

[3] 本稿では、先行研究(Ambrosio and Vandrovec 2013)の手法を踏襲して、外交関係、対外的軍事安全保障、国際機構・地域機構、対外的経済関係に関わる問題を「外交・安全保障政策」と捉える。例えば、ロシア軍に関する言及について、それが軍の改革、軍人の待遇改善などに関する場合は国内問題とし、対外的脅威への対応などに関する場合のみを「外交・安全保障政策」とした。また、経済関係においては、国際機構への参加、旧ソ連地域の経済統合、移民問題などについてを「外交・安全保障政策」とした。さらに、クリミア、ドンバス問題は、ロシア国内の文脈では「国内問題」と理解されうるが、その問題の性質を考慮して全て「外交・安全保障政策」とした。

最後で外交問題に触れ、独立国家共同体（CIS）や欧州連合（EU）との関係を中心に外交政策の課題に言及した。続くメドヴェージェフ政権（2008-12）は、前述の 2008 年を除いて国内問題に話題が集中し、2009 年から 11 年の 3 年間では外交・安全保障問題への言及は平均して 10%を下回った。2012 年のプーチンの大統領復帰以降、外交・安全保障問題は再び重要性を増した。前述のように、この第二次プーチン政権は大規模な抗議運動が頻繁に起こる中で始動したため、政権は国民との新たな「社会契約」を模索し、ロシア独自の価値観や愛国主義を強調するようになったと言われる(Feldmann and Mazepus 2018; Hutcheson and Petersson 2016)。そのような状況を反映して、大統領教書演説に占める外交政策の割合も増加傾向を示すようになった。

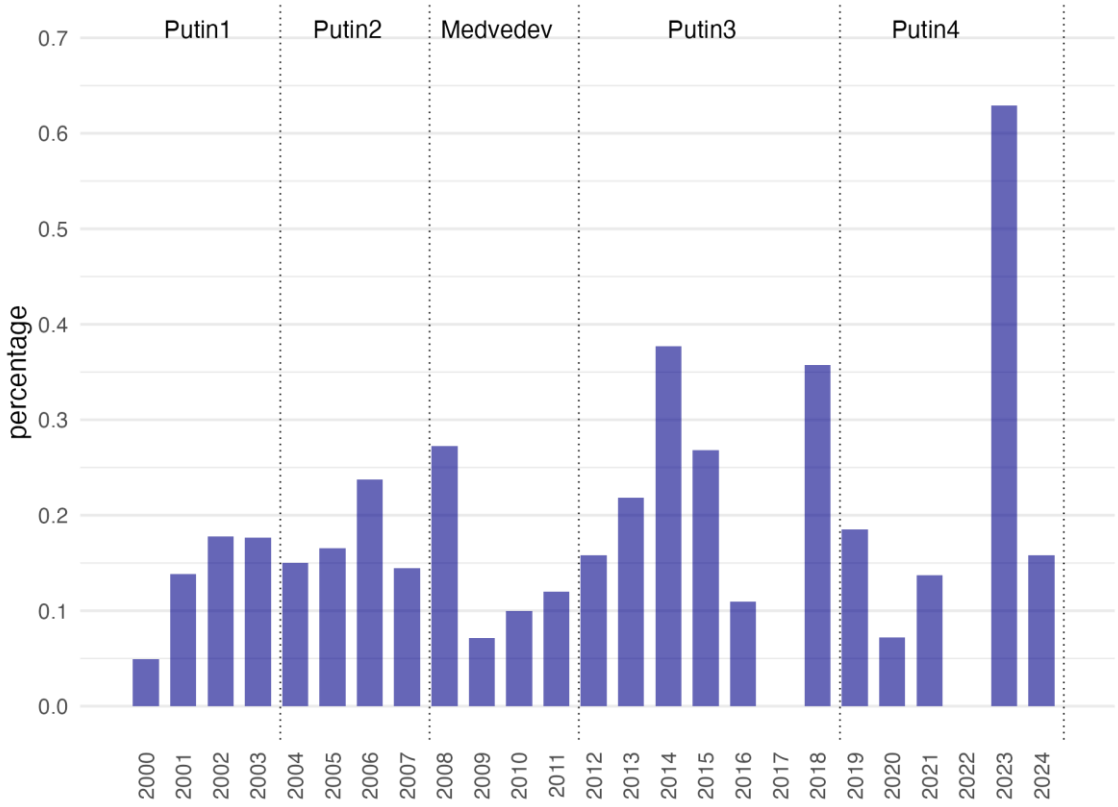

図 1　各年の大統領教書演説における外交・安全保障政策の割合

3. 反西側主義の定義と操作化

前項で、本稿での「反西側主義」の定義を示した。しかし、この概念を実際に分析するためには、まずその敵意の対象である「西側」が何を意味しているかを整理する必要がある。

プーチンの思想的変化を長年研究してきたマリエル・ラリュエルによれば、ロシアの公式言説に登場する「西側」という言葉は多義的で曖昧な概念である(Laruelle 2025, 78–79)。それは、自由、人権、民主主義などといった西側的な「普遍的価値」を指すこともあれば、米国、EU、NATO などの具体的な国家や国際機構を指すこともある。ここでは、前者を規範的側面、後者を地政学的側面として区別し、それぞれが先行研究の中でどのように論じられてきたかを検討する。

規範的側面においては、反西側主義は欧米諸国で発展してきた自由主義的価値観への反発、すなわち反自由主義として理解されてきた(Faure 2025, 24; Laruelle 2016)。実際、ロシア国内では独立メディアへの規制や、性的少数者の権利を制限する立法などを通じて、個人の自由を制限する動きが進んでいる。プーチン自身もインタビューで自由主義は「時代遅れ」だと述べたことがあるし(Barber, Foy, and Barker 2019)、「堕落した欧州」を揶揄するために「ゲイローパ」（ゲイ＋ヨーロッパ）という言葉もよく使われる。このように、反西側主義の中には、西側諸国による「過剰な」個人の自由の押し付けへの反発という側面がある。

欧米的な自由主義の行き過ぎを「非道徳的」と批判する一方で、政府は自国の伝統的価値観を「道徳的・倫理的」なものとして積極的に称揚するようになった。ラリュエルも、ロシアの反自由主義は「愛国主義」「道徳」「独自の文化」といった要素に支えられていると指摘している。愛国主義は「母国（родина）」や「祖国（отчество）」への献身を意味し、ときに国家への自己犠牲を伴うものとして語られる。また、道徳 (нравственность) や精神性 (духовность) といった言葉は、伝統的な家族観や性役割、年長者への尊敬などと結びつけて用いられることが多い。さらに、プーチンをはじめとするロシアの政治エリートは、ロシアを西側とは異なる独自の文化・文明圏と位置付けている。このように、現在のロシアでは、反自由主義的立場と並行してロシアの伝統的価値観を強調する立場が強まってきた。そして、前述のように、多くの研究者はその転機を 2011 年から 12 年ごろに見出している。以上を踏まえ、本稿では反西側主義の規範的側面を示すキーワードとして、「自由」「民主主義」「伝統」「愛国主義」「文明」「道徳」「文化」を抽出した。

もう 1 つの地政学的側面においては、反西側主義は、西側の軍事安全保障戦略への反発を意味する。この立場では、西側の脅威がロシアの主権や国際的な安定を脅かしていると認識されている (Składanowski 2023, 182)。コソヴォ紛争、NATO の東方拡大、カラー革命に代表されるように、地政学的側面における反西側主義は、ロシアが考える自らの勢力圏と西側との境界地域をめぐって現れることが多い。特に、旧ソ連地域を自らの勢力圏と考えるロシアにと

って、この地域への西側の影響力拡大は自らの安全保障を脅かす重大な問題と認識されてきた。また一般に、ロシア外交が反西側的傾向を強めるのにつれて、中国との接近も進んだと考えられている。そのため、「米国」「欧州」「EU」「NATO」「西側」といった直接的な対象だけでなく、旧ソ連地域や中国など非西側地域を示す単語も分析対象に含めた。

以上に基づで、表 2 のようなキーワードリストを作成した。これらが反西側主義の規範的側面と地政学的側面を構成すると考え、次節では大統領教書演説におけるそれらの相対頻度の変化を分析する。

表 2　反西側主義に関連するキーワード一覧

規範的キーワード	
Democracy	democracy, democracies, democratic, democratization
Liberalism	liberal(s), liberalism, liberali[sz]ation, liberty, free*, freedom(s), neoliberal, neoliberalism
Tradition	tradition(s), traditional, traditionally
Civilization	civili[sz]ation(s), civili[sz]ational, civili[sz]ed
Patriotism	patriot(s), patriotism, patriotic, motherland, fatherland, loyalty
Morality	moral(s), morality, immoral, immorality, spiritual, spirit, spirituality, spiritually, ethic(s), ethical
Culture	cultural, culturally, Russian culture, Russian language, Russian art

地政学的キーワード	
West	West, Western
NATO	NATO, North Atlantic, Euro-Atlantic
EU	EU, European(s), European Union, Europe, Brussels
United States	United States (of America), America†, American(s), US, USA, Washington
CIS	CIS, Commonwealth of Independent States, CSTO, Collective Security Agreement Organi[sz]ation, Collective Security Treaty Organi[sz]ation
Eurasia	Eurasia(n), Customs Union, Common Economic Space, EurAsEC, EAEU
Post-Soviet states	Georgia, Georgian(s), Kazakhstan(i), Belarus(ian), Kyrgyzstan, Armenia
Ukraine	Ukraine, Ukrainian, Kiev
China	China, Chinese, Beijing, SCO, BRICS, Shanghai
Non-Western states	India(n), Turkey, Turkish, Arab, Syria(n), Iran(ian), Iraq, Libya, Middle East(ern),

	Latin America, South America, Brazil, Africa(n), Asia(n), Vietnam, Singapore, ASEAN, APEC

注：大統領教書演説で使用されていない単語・国名などはリストから排除している。

* “free education” “free healthcare”など無料（бесплатный）という意味の場合はカウントしない。

† Latin America, South America として言及されている場合はカウントしない。

4. キーワードの相対頻度分析

(1) 規範的側面

大統領教書演説における反西側主義はどのように変化していったのか。図 2 は、反西側主義の規範的側面を体現するキーワードについて、大統領教書演説の中での相対頻度（1000 語あたりの出現頻度）の変化を表したものである。この図からいくつかの特徴を指摘できる。第一に、第一次政権期のプーチンおよび 2008 年のメドヴェージェフは、「民主主義」や「自由主義」という概念に頻繁に言及したが、2009 年以降その頻度は低下していった。初期の年次教書においてプーチンは、民主主義や自由、市場経済といった概念がロシアの発展の方向性であることに繰り返し言及し、ロシアが国際社会への統合に向かっていることを強調していた。対照的に、2009 年以降は自由や民主主義といった言葉に大統領が言及する機会は大きく減少した。メドヴェージェフが大統領だった時代も含めて、民主主義や自由といった言葉は大統領教書演説の中でほとんど使われなくなり、特に 2012 年に始まる第二次プーチン政権下でそれは顕著であった。

第二に、「伝統」「道徳」「ロシア文化」「ロシア語」といったロシアの伝統や文化に関連する単語の使用頻度が、2012 年にいずれも上昇した。2012 年はプーチンが大統領に復帰した年であり、この年に「保守的転回」や「イデオロギー的転回」が起きたと先行研究が主張してきたことは既に述べたとおりである。その年にこれらの単語が多く用いられたということは、先行研究の主張を一定程度支持していると言えよう。ただし、これらの単語は 2012 年以前から使われており、この年に新しく登場してきたわけではない。たとえば、プーチンは 2007 年を「ロシア語年」に指定し、ロシア語を通じた国家の統一強化を推進しようとした。また、2012 年の一時的上昇以降、これらの単語の使用頻度は再び低下傾向にあり、2022 年のウクライナ侵攻以降に再度増加し始めている。こうしたことは、少なくとも使用頻度という観点から言えば、「保守的転回」で生じたロシアの伝統や文化を重視する傾向が、2012 年に突如登場したものでも、その後一貫して継続していたわけでもないことを示唆している。も

ちろん、これは単に使用頻度に限定した話であり、それがどのような文脈で用いられているかは実際の演説の内容を見なければならない。

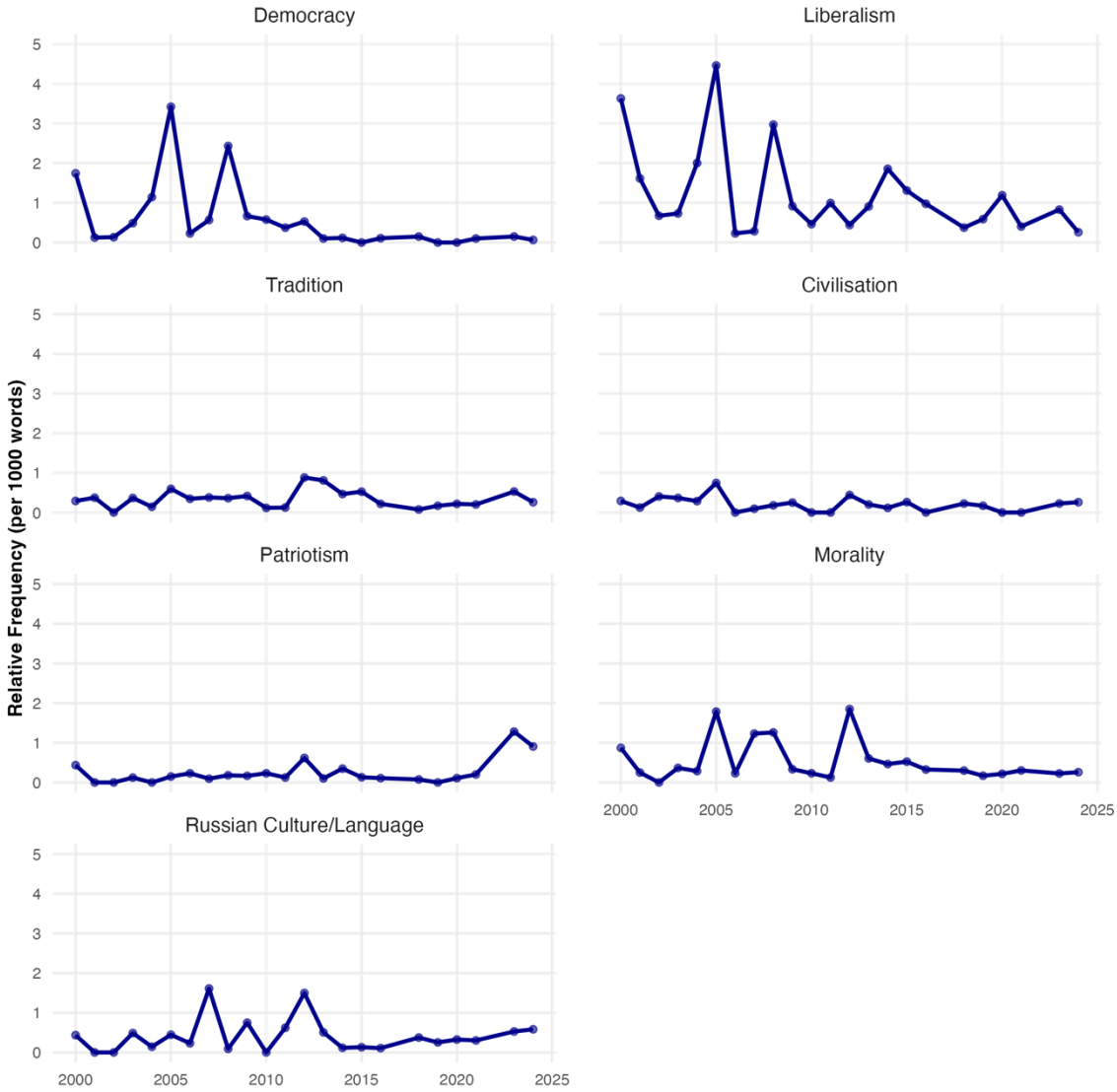

図 2　規範的キーワードの相対頻度の変化

(2) 地政学的側面

同じような相対頻度分析を、地政学的側面を代表する単語について行った結果を示したのが、図 3 と図 4 である。図 3 を見ると、まず米国と欧州の変化が対照的であることがわかる。前述したように、プーチンは第一次政権の教書演説においては、外交政策に関する部分でま

ず欧州との関係強化の必要性に言及する一方で、米国との関係については具体的な問題にほとんど言及しなかった。そのため、この時期は欧州に関しては継続的に相対頻度が高いのに対し、米国に関してはその数値が極めて低い。しかし、メドヴェージェフ政権期以降は、欧州に対する言及が減少していく一方で、米国については、2008 年、14 年、18 年、23 年と 4 つのピークがあることが見てとれる。前述したように、この 4 年はいずれも教書演説全体の中で外交政策の占める割合が高かった年である。つまり、教書演説の中で外交政策に割かれる割合が高い年（その多くはロシアの旧ソ連諸国における武力行使の直後であった）には、大統領は米国との関係にも多く言及していたのである。

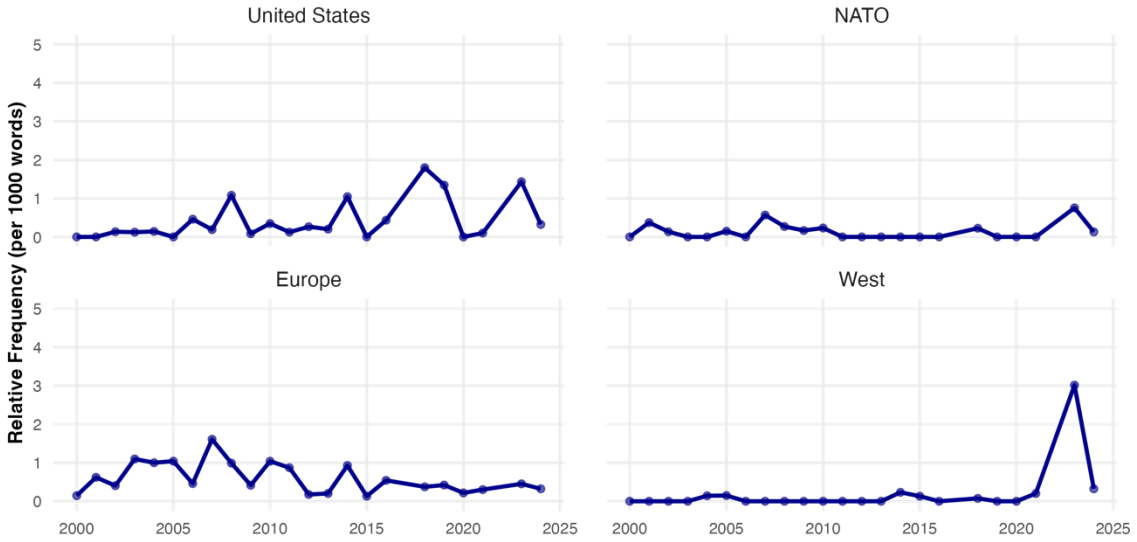

図 3　地政学的キーワード（西側）の相対頻度

もう 1 つの興味深い点としては、NATO と西側という単語が分析対象期間を通じてごく稀にしか登場していないということである。NATO は 2000 年代にわずかに言及された年があるが、2010 年代にはその頻度はほぼゼロであった。クリミア併合後の 2014 年の演説では、プーチンは外交・安全保障政策にかなりの時間を費やし、その中では米国の ABM 条約からの脱退も批判しているが、この文脈において NATO に言及することはなかった。このことから、地政学的側面における反西側主義は、大部分において「反米主義」であったことがわかる。それに対し、いわゆる「集団としての西側（the collective West / коллективный Запад）」が教書演説における批判の対象として登場するのは、ロシアによるウクライナ侵攻後である。ロシアによる NATO 東方拡大への批判、西側諸国への批判はウクライナ侵攻開始前から長らく存在

していたが、大統領教書演説においてはNATOを名指しで批判したり、西側をまとめて批判することは、ほとんどの時期で行われていなかった。そのような言説が本格化するのがウクライナ侵攻後というのは、予想に反する結果であった。

非西側地域を代表する単語の相対頻度を示した図4を見ると、ロシアにとって2010年代半ばまで、旧ソ連地域との統合が重要な政策課題であり続けてきたことがわかる。2000年代にはCISの枠組みに基づく統合（もしくはこの地域へのロシアの影響力拡大）が試みられてきたのに対し、メドヴェージェフ政権下では共同経済空間、ユーラシア経済共同体、ユーラシア経済同盟と名前を変えながら、新たな統合の形が模索されてきた。特に、2011年のメドヴェージェフの演説では、2015年までにユーラシア経済同盟を設立するという計画の重要性が強調された (Медведев 2011) 。これは、その直前にプーチンが『イズヴェスチヤ』紙に寄稿した論文においてユーラシア統合への強い意志を示したことに呼応するものであった (Путин 2011)。

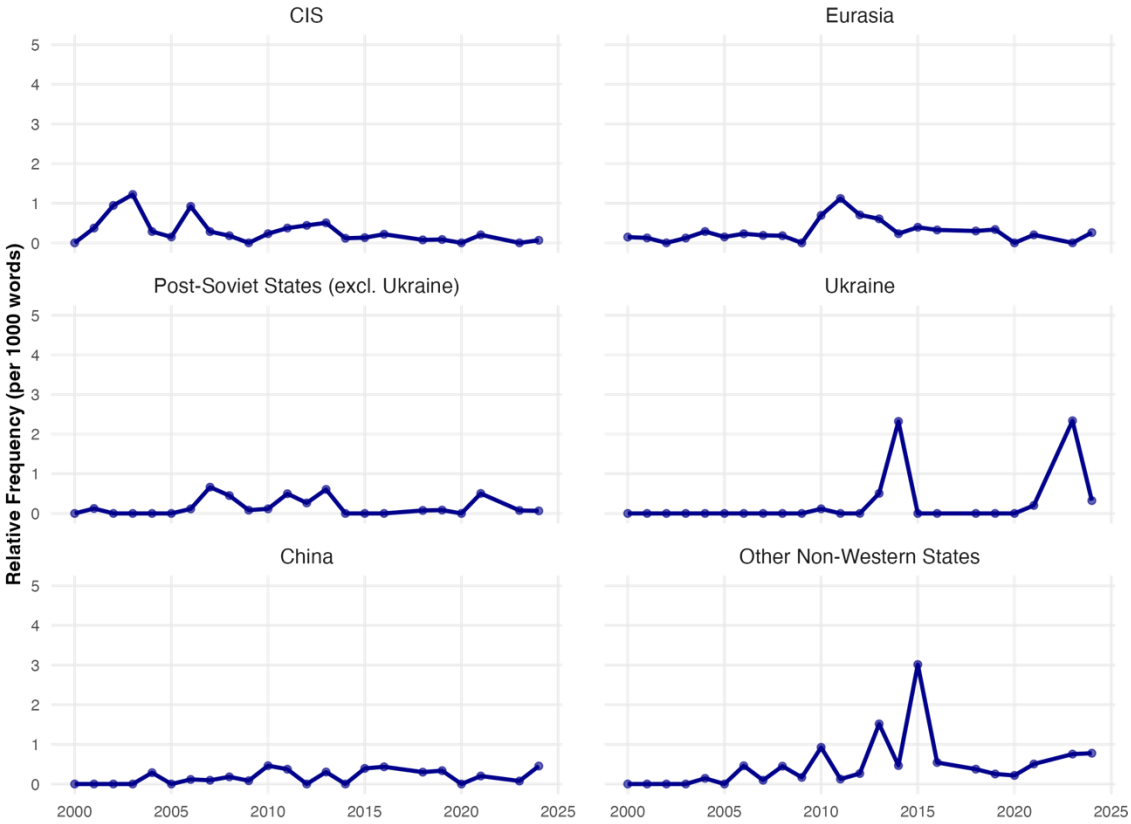

図4 地政学的キーワード（非西側）の相対頻度

しかし、2014 年以降ユーラシア統合の課題は教書演説の中でほとんど言及されなくなった。また、中国、BRICS、上海協力機構といった中国および中露が参加する地域機構への言及にも目立った増加はなかった。もちろんこの時期のプーチン政権にとって非西側地域との連携は重要な政策課題であったものの、大統領教書演説ではそうした連携が西側に対抗するものとして提示されることはなかった。

5. 質的分析を通じた考察

(1) 反自由主義的言説の台頭

頻度分析はキーワードの重要性が時系列でどのように変化したかを見る上では役立つが、それぞれがどのような文脈で用いられているかは明らかにできない。たとえば、「自由」や「民主主義」といった言葉が頻繁に使われていても、それが肯定的な意味で用いられているか、否定的な意味で用いられているかによって、頻度の高さが持つ意味合いは大きく異なる。そこで本節では、表 2 で挙げたキーワードがどのような文脈で用いられているか、そして使われる際のレトリックの変化に注目して、質的に大統領教書演説を分析する。

2000 年代前半の大統領教書演説においてプーチンが一貫して強調したのは、民主主義の発展、市民の生活水準の向上、そしてロシアの大国としての地位回復という 3 つの課題であった。前節で見たように、プーチンはこの時期自由民主的価値に頻繁に言及し、ロシアの国際社会への統合を目標として掲げた。そして、それらは愛国主義や伝統、文化といった要素と対立するものではなく、むしろ共存可能なものとして語られていた。たとえば、2000 年の演説でプーチンは、「ロシアの民主制度と世界に対する開放性は、我々の独自性や愛国主義と矛盾するものではなく、我々が精神性や道徳に関して独自の答えを見つけることを妨げるものではない」と述べている（Путин 2000）。また、2007 年にも、「独自の文化的・精神的アイデンティティを持つことは、世界に開かれた国家を作り上げることを妨げるものではない」と述べている（Путин 2007a）。このように、プーチンはロシアが独自性を持ちつつも開かれた国家であることを強調しており、この時期は反西側主義的なレトリックがまだ明確には形成されていなかった。

しかし、2000 年代半ば以降、この状況は徐々に変化していった。図 2 が示すように、2005 年の教書演説では、「自由」と「民主主義」という語が最も頻繁に用いられた。ただし、それは自由民主的価値への支持を意味したわけではなかった。むしろプーチンは、ロシアが民

主主義の発展において「独自の道」を進むべきだと強調していた。この演説は、プーチンがソ連解体を「20 世紀の地政学的大惨事」と表現したことで有名であるが、プーチンは「自由で民主的な国家」形成の目標を掲げつつも、「民主的手続きの発展は法と秩序を犠牲にして進められるべきではない」と主張した（Путин 2005）。つまり、自由民主的価値を守るという主張を一貫して持ちつつも、ロシアの政治的独自性に対する主張も強まった。

ロシアの政治評論家ヴィタリー・トレチャコフは、この 2005 年の演説に「プーチンの政治哲学」が表れていると評した。彼は、民主主義は外部から導入された理念ではなく、ロシアの歴史に根差したものであると主張し、プーチンの政治哲学を示す言葉として「主権民主主義」という概念を導入した（Третьяков 2005）。その後プーチン政権のイデオローグとして大統領府副長官や副首相を歴任したウラジスラフ・スルコフが、この概念を体制のイデオロギーの中核に据えたため、「主権民主主義」は一時期プーチン体制を象徴する言葉となった。スルコフによれば、ロシアの経済発展やグローバル経済の統合という目標のためには、民主主義の発展が不可欠である一方、その主権は対外的脅威から守られなければならない。彼は、2004 年にウクライナで起きたオレンジ革命の背後にある西側の民主化支援を「オレンジ技術（оранжевая технология）」と呼び、それが国家の非効率性や内紛を煽ることによって、主権を脅かしていると批判した（Kortukov 2020; Сурков 2006）。実際に、2007 年の教書演説ではプーチンも西側の民主化支援を他国の国内問題への干渉だと非難し（Путин 2007a）、対外的脅威から主権を守る必要性を強調した。

ただし、そうした主張は国際社会への積極的参入という従来の主張を否定したわけではなかった。この時期、ロシアは原油価格の高騰によって財政的自律を回復したが、プーチンが求めたものは国際社会におけるロシアの地位の向上であり、西側諸国との対立やその価値観の否定ではなかった。プーチンは、ロシア独自のアイデンティティを強調し、国際社会における規範の多極性を主張するようにはなったものの、ロシアが世界にむけて開かれていることも重視し、その主張は国際社会への統合というこれまでの目標から逸脱するものではなかった。

プーチンが大統領を退任し、メドヴェージェフが新たに大統領に就任した 2008 年には、メドヴェージェフは民主的価値の重要性を強調した。彼はこの演説で「民主主義こそが前に進む道でそのことに議論の余地はない」と述べており、こうした発言は当時の彼のリベラル政治家というイメージを構築するのに役立ったと言えよう(Медведев 2011)。しかし、彼はその 4 年の任期を通じて一貫してこのような考え方を発信していたわけではなかった。2009 年以降

の演説では自由民主主義的価値への言及は減少し、その傾向は 2012 年以降の第二次プーチン政権に引き継がれていった。

2012 年以降の教書演説では、民主主義は外部から押し付けられた基準であり、ロシアの主権を脅かしうるものだという主張がますます顕著になった。プーチンは、シリアの例を挙げて、外から押し付けられた価値観は「抑圧と流血」を生むと非難した（Путин 2013）。さらに、2014 年の演説では、ウクライナの問題をチェチェンの分離主義と同列に論じ、西側の干渉が「不安定化」を引き起こしていることを非難した。プーチンは、「当時、誰がどのように、分離主義やあからさまなテロリズムを支援し、反乱分子でしかない血で汚れた手を持つ殺人者を呼び出し、盛大なレセプションを開いていたかを我々はよく覚えている」と述べた。その上で、西側諸国は「自由と民主主義のための戦士と自称するテロリスト」を支援し、ロシアの弱体化を図ってきたという考えを示した。さらに、西側の支援は市民の自由を推進するものではなく、ロシアを封じ込めるための戦略であるとまで言ったのである（Путин 2014a）。

このような文脈の中で、ロシアの伝統的価値観は、自由民主的価値と「共存可能」なものから、西側の介入から「守られるべきもの」へと変化した。たとえば、2015 年 12 月に発表された国家安全保障戦略では、ロシアの「精神的・道徳的価値（духовно-нравственные ценности））」を維持し、振興する重要性が繰り返し強調された（СНБ РФ 2015）。Østbø(2017)は、この国家安全保障戦略において伝統的価値や精神的・道徳的価値の概念が、国家安全保障の問題として扱われるようになったことを指摘している。さらに、2019 年にプーチンは「何世紀にもわたる伝統や国民の文化、価値観、慣習に根ざした独自のアイデンティティを持つ文明としてロシアを維持する」という目標を掲げた（Путин 2019）。2022 年のロシアによるウクライナ侵攻以降、ロシアを 1 つの「文明」とみなす枠組みは一層強まっている。そして、「母国」や「祖国」といった言葉を頻繁に用いて、愛国心の喚起を図っている。

以上の変化からわかるのは、ロシアの規範的なナラティブは突然ではなく、徐々に、かつ状況に応じて変化してきたということである。プーチン政権初期には、自由民主主義的価値と伝統的価値は対立するものではなく、互いに補完し合うものとして位置づけられていた。しかし 2000 年代半ばになると、プーチンは民主主義を西側の概念として受容するのではなく、ロシア独自の歴史や伝統に根ざした価値として再定義し、ロシアは「独自の道」を進むべきだと強調するようになった。この過程で、民主主義の理念は国家主権の防衛や文化的独

自性と結びつくようになった。2012 年以降の演説では、民主主義は「外から押し付けられた基準」と位置付けられ、伝統や文明的価値はそこから守られるべきものとなった。その結果、かつては両立可能とされていた民主主義と伝統的価値は、次第に相容れないものとして語られるようになった。そしてロシアは、自らを自由主義に対抗する独自の文明として位置づけるようになった。

(2) 欧州中心主義から反米主義、そして「集団としての西側」へ

地政学的側面における「反西側主義」は、欧州の安全保障とロシアと旧ソ連諸国の関係という 2 つの文脈で展開してきた。規範的側面と同様、地政学的側面における変化も漸進的であったが、両者は異なる時間軸や文脈の中で発展してきた。

2000-08 年の第一次政権期におけるプーチンの教書演説には、一定の定型的なパターンがみられた。外交・安全保障政策への言及は常に演説の最後に置かれた。そして、まずは CIS をはじめとする旧ソ連諸国がロシアにとって重要であることや、地域統合の展望について述べ、その後に欧州とのパートナーシップ強化の必要性に言及するという構成がとられていた。たとえば、プーチンは 2005 年に「ロシアは過去、現在、未来にわたり欧州の大国である」と述べており（Путин 2005）、欧州との関係を重視し、それを主要なパートナーとみなしていたことが分かる 。一方で、米国への言及は極めて限定的であり、しばしば中国やインドと並べて関係強化の必要性に触れる程度にとどまった。このような欧州と米国への言及の差異は対照的であり、それは前節の頻度分析の結果と一致している。

こうしたパターンが最初に変化したのは、2007 年であった。この年の教書演説の 2 ヶ月前に行われたミュンヘン安全保障会議において、プーチンは米国が主導する「一極世界」を厳しく批判していた。彼はそのような体制を「許容できないだけでなく、今日の世界では実現不可能である」と主張したのである。また、NATO の拡大を「深刻な挑発」と位置づけ、ヨーロッパの信頼と安定を損なうものだと批判した（Путин 2007b）。こうした背景のもと、同年の教書演説においてプーチンは、欧州通常戦力条約がロシアに不平等な義務を課しているとし、その履行停止を宣言した。さらに、米国による NATO 新規加盟国へのミサイル防衛システム配備計画は、ロシアにとって「現実的な脅威」だと指摘した（Путин 2007a）。ここで、ロシアの地政学的言説は転換し、米国を明確な戦略的ライバルと位置づけるようになった。

2008年のジョージア戦争と世界金融危機は、ロシアの反米主義をさらに強めた。ジョージアに関してメドヴェージェフ大統領は、「ツヒンヴァリの悲劇は、批判に耳を貸さず一方的な決定を望んだ米国政権の思い上がりにその原因の一端がある」と述べた。この戦争は、ジョージアとウクライナのNATO加盟の可能性が議論された2008年のブカレスト首脳会議の後に発生しており、米露関係が悪化する重要な転機となった。さらにメドヴェージェフは金融危機にも米国の責任があるとし、ソ連崩壊後に米国が「自らの見方だけが唯一正しい」と信じるようになったことが、最終的に危機を招いたと主張した（Медведев 2008）。これらの出来事は、ロシアの公式言説における反米主義を一層強める結果となった[4]。

もっとも、地政学的側面における反米主義は、規範的な反自由主義とは別の文脈で発展したことは注目に値する。メドヴェージェフは、反米主義を露わにした2008年の演説において、自由民主的価値へのコミットメントも同時に強調していた。つまり、同じ演説の中で、地政学的な反米主義と規範的な自由民主主義的規範への支持が表明されており、両者は切り離されていた。この時点では、反西側的な言説における地政学的側面と規範的側面は、いまだ異なる論理をもっていたと言える。

この2つの側面が結びついたのが、2014年である。この時、プーチンはウクライナで起きたユーロマイダン革命を「武装クーデタ」や「力による権力奪取」と呼び、これは米国の影響力によって引き起こされたと述べた（Путин 2014a）。ここで重要なのは、 西側の民主化支援策に対するロシアの批判が、それまでと異なる意味を帯び始めた点にある。上述のとおり、プーチンは従来から西側の民主化支援を「不当な内政干渉」と批判してきた。ここではそれに加えて、こうした「介入」は西側がロシアを封じ込めようと長期的に行ってきた戦略の一環であると主張したのである。2014年3月18日のクリミア併合を宣言した演説で、プーチンは「18世紀、19世紀、20世紀に続いてきた悪名高い封じ込め政策は、今日も続いている」と述べた（Путин 2014b）。さらに同年の教書演説では、たとえユーロマイダン革命のような出来事がなかったとしても、「ロシアの拡大する力を抑え込むために別の口実が作られていただろう」と強調した。ウクライナの政治危機とその後の制裁を「西側による封じ込め戦略」と結びつけ、さらに米国のミサイル防衛網による軍事的包囲という主張とも組み合わせることで、プーチンは西側が「介入」と「包囲」という手段を用いてをロシアを脅かして

[4] 一方で、EUとの協力に関する言及は2008年以降急速に減少した。ただし、その後もEUへの言及は、概して肯定的な文脈で行われた。

いると主張した（Путин 2014a）。このようにして、この演説はそれまで別々に展開してきた規範的言説と地政学的言説を結びつけた。

それでは、なぜ 2008 年のジョージア戦争では地政学的側面でしか言説の変化が起きなかったのに対し、2014 年のユーロマイダン革命では反西側主義全体が急進化したのだろうか。この違いは、ロシアにとってウクライナが戦略的に重要な国家だったというだけでは説明できない。確かにそれはロシアの政策決定者にとって重要な要因であっただろう。しかし、それ以上に重要なのは、2012 年ごろの「保守的転回」を経験して、自由民主主義そのものの意味づけが大きく変化していたためである。この頃から、それは政治的転覆や体制不安定化をもたらす手段として描かれるようになった。その結果、ユーロマイダン革命は単なる規範的問題ではなく、ロシアを敵視する西側の戦略を証明するものとして解釈された。別の言い方をすれば、西側の価値観への反発と安全保障上の脅威認識が結びつき、互いに補強し合うようになったのである。

さらに、2022 年のウクライナ侵攻以降、ロシアの反西側的言説はさらに変化している。プーチンの批判は、もはや米国単独ではなく、「集団としての西側」へ向けられるようになった。以前は「西側」という言葉が教書演説で多用されることはなかった。しかし 2023 年の演説では、戦争を正当化する文脈の中で、この語が 40 回も用いられた。またプーチンは、西側が「ロシアの戦略的敗北」を望んでおり、それは「我が国の存立に関わる脅威」であると主張した（Путин 2023）。この演説から 2 つの重要な含意を読み取ることができる。第一に、「西側」はロシアを敵視する単一の主体として再定義されている点である。かつて存在した米国と欧州の区別はもはや見られない。第二に、「ロシアの存立に関わる脅威」と位置付けることで、「集団としての西側」との対立を国家の生存に関わる問題として描くようになっている。このような戦時の正当化論理によって、反西側主義はさらに急進化していった。

結論

本稿では、ロシアの公式言説において近年顕著になっている反西側主義がどのように形成されたのかを分析した。その結果、ロシアの反西側主義はプーチン政権初期から一貫して存在していた固定的な思想ではなく、複数の要素が交錯しながら発展し、2014 年以降により明確で統合的な形をとるようになったことが明らかになった。

この結論は、主に 3 つの分析結果に基づいている。第一に、ロシアの「伝統的価値」を強調する言説は 2000 年代から断続的に存在していたものの、当初は自由民主主義も同時に肯定されており、反西側的な立場はまだ限定的なものにとどまっていた。第二に、反西側主義を構成する規範的側面と地政学的側面は、それぞれ異なる時間軸と文脈の中で発展していた。つまり、体系的に設計されたイデオロギーというよりも、国内外の状況変化に応じて徐々に形成されていったものである。第三に、2014 年以降になると、それまで別々に展開していた要素が結びつき、西側を「敵」とみなす、より一貫した言説が登場した。これはロシアの公式言説における質的な変化を意味している。

本研究の貢献は、反西側主義という概念を整理し、その形成過程をより明確に示した点にある。従来の研究では、反西側主義は厳密な定義が与えられないまま、「プーチニズム」を構成する重要な要素として扱われてきた。しかし本研究では、それを規範的側面と地政学的側面という 2 つの側面から捉えることによって、概念の整理を試みた。その結果、ロシアの政治がそれをどのように用い、動員してきたのかを、より具体的に分析できるようになった。

さらに本研究は、反西側主義がどのように先鋭化していったのかを示した。反西側的な言説の先鋭化は、あらかじめ決められたイデオロギーが直線的に発展した結果でも、外部アクターの行動に対する場当たり的な反応の結果でもない。本稿が明らかにしたのは、異なる言説が当初は部分的に独立して発展していたものの、政治状況の変化に応じて徐々に結びつき、互いを補強するようになったという点である。この観点から見ると、2007 年から 2008 年にかけての反米主義の高まりは、決定的な転換点ではなく、進行中の言説変化の一段階として理解できる。一方、2014 年以降の変化は、地政学的言説と規範的言説が結びつき、互いを補強することによって生じた。ここから分かるのは、過去に蓄積された言説が、その後に起こる政治危機をどのように解釈するかを方向づけていたということである。つまり、危機そのものが急進化を引き起こしたのではなく、すでに進行していた言説の変化と政治危機が結びつくことによって、急進化が可能になったのである。

こうした点は、ロシア政治を理解する上でも重要な意味を持つ。当初はあまり目立たなかった反西側言説は、政治危機を経るたびに強化され、やがて自らの政策や行動を縛る枠組みへと変化していった。外交面では、この変化によって、西側との交渉や妥協を正当化することが次第に難しくなった。国内政治においても、「外部の脅威」や「主権の擁護」を強調してきた従来の言説と整合性を保とうとすればするほど、それまでの政策を転換する余地は狭められていった。つまり、反西側的な言説は、それと整合的な政策選択を繰り返し求めるこ

とで、政策転換の余地を狭め、ロシア外交を後戻りが困難なほど先鋭化させていったのである。

参考文献

Ambrosio, Thomas, and Geoffrey Vandrovec. 2013. “Mapping the Geopolitics of the Russian Federation: The Federal Assembly Addresses of Putin and Medvedev.” *Geopolitics* 18(2): 435–66. doi:10.1080/14650045.2012.717554.

Barber, Lionel, Henry Foy, and Alex Barker. 2019. “Vladimir Putin Says Liberalism Has ‘Become Obsolete.’” *Financial Times*. https://www.ft.com/content/670039ec-98f3-11e9-9573-ee5cbb98ed36?syn-25a6b1a6=1.

Bellamy, Alex J. 2023. *Warmonger: Vladimir Putin’s Imperial Wars*. Newcastle upon Tyne, England: Agenda Publishing. doi:10.1017/9781788216487.

Casier, Tom. 2006. “Putin’s Policy Towards the West: Reflections on The Nature of Russian Foreign Policy.” *International Politics* 43(3): 384–401. doi:10.1057/palgrave.ip.8800153.

Faure, Juliette. 2025. *The Rise of the Russian Hawks: Ideology and Politics from the Late Soviet Union to Putin’s Russia*. Cambridge, United Kingdom ; New York, NY: Cambridge University Press.

Feldmann, Magnus, and Honorata Mazepus. 2018. “State-Society Relations and the Sources of Support for the Putin Regime: Bridging Political Culture and Social Contract Theory.” *East European Politics* 34(1): 57–76. doi:10.1080/21599165.2017.1414697.

Galeotti, Mark. 2019. *We Need to Talk About Putin: How the West Gets Him Wrong*. London: Ebury Press.

Götz, Elias. 2017. “Putin, the State, and War: The Causes of Russia’s Near Abroad Assertion Revisited.” *International Studies Review* 19(2): 228–53. doi:10.1093/isr/viw009.

Hutcheson, Derek S., and Bo Petersson. 2016. “Shortcut to Legitimacy: Popularity in Putin’s Russia.” *Europe-Asia Studies* 68(7): 1107–26. doi:10.1080/09668136.2016.1216949.

Kortukov, Dima, and Julian G. Waller. 2024. “The Foundations of Russian Statehood: The Pentabasis, National History, and Civic Values in Wartime Russia.” *Communist and Post-Communist Studies* 58(2): 1–27. doi:10.1525/cpcs.2024.2271407.

Laqueur, Walter. 2015. *Putinism: Russia and Its Future with the West*. First edition. New York: Thomas Dunne Books.

Laruelle, Marlene. 2013. "Conservatism as the Kremlin's New Toolkit: An Ideology at the Lowest Cost." *Russian Analytical Digest* (138): 2–4.

Laruelle, Marlene. 2016. "Russia as an Anti-Liberal European Civilisation." In *The New Russian Nationalism: "Imperialism, Ethnicity and Authoritarianism 2000-2015,"* eds. Pål Kolstø and Helge Blakkisrud. Edinburgh: Edinburgh University Press, 275–97. doi:10.3366/edinburgh/9781474410427.003.0011.

Laruelle, Marlene. 2025. *Ideology and Meaning-Making under the Putin Regime*. 1st ed. Redwood City: Stanford University Press. doi:10.1515/9781503641600.

Light, Margot. 2015. "Russian Foreign Policy Themes in Official Documents and Speeches: Tracing Continuity and Change." In *Russia's Foreign Policy: Ideas, Domestic Politics and External Relations*, eds. David Cadier and Margot Light. London: Palgrave Macmillan UK, 13–29. doi:10.1057/9781137468888.

Linde, Fabian. 2016. "The Civilizational Turn in Russian Political Discourse: From Pan-Europeanism to Civilizational Distinctiveness." *The Russian Review* 75(4): 604–25.

Østbø, Jardar. 2017. "Securitizing 'Spiritual-Moral Values' in Russia." *Post-Soviet Affairs* 33(3): 200–216. doi:10.1080/1060586X.2016.1251023.

Robinson, Neil. 2017. "Russian Neo-Patrimonialism and Putin's 'Cultural Turn.'" *Europe-Asia Studies* 69(2): 348–66. doi:10.1080/09668136.2016.1265916.

Sharafutdinova, Gulnaz. 2020. *The Red Mirror: Putin's Leadership and Russia's Insecure Identity*. Oxford, New York: Oxford University Press.

Składanowski, Marcin. 2023. "We Are No Longer Europeans: The Evolution of the Image of Europe and the West in Russian Strategic Documents (2007–2023)." *Studia Rossica Gedanensia* (10): 179–89. doi:10.26881/srg.2023.10.12.

Snegovaya, Maria, Michael Kimmage, and Jade McGlynn. 2023. *The Ideology of Putinism: Is It Sustainable?* Washington, DC: Center for Strategic and International Studies. https://www.csis.org/analysis/ideology-putinism-it-sustainable.

Snegovaya, Maria, and Jade McGlynn. 2025. "Dissecting Putin's Regime Ideology." *Post-Soviet Affairs* 41(1): 42–63. doi:10.1080/1060586X.2024.2386838.

Suslov, Mikhail. 2024. *Putinism – Post-Soviet Russian Regime Ideology*. Abingdon, Oxon ; New York, NY: Routledge.

Taylor, Brian D. 2018. *The Code of Putinism*. New York: Oxford University Press.

Tsygankov, Andrei P. 2007. "Two Faces of Putin's Great Power Pragmatism." *The Soviet and Post-Soviet Review* 34(1): 103–19. doi:10.1163/187633207X00076.

Tsygankov, Andrei. 2016. "Crafting the State-Civilization Vladimir Putin's Turn to Distinct Values." *Problems of Post-Communism* 63(3): 146–58. doi:https://doi.org/10.1080/10758216.2015.1113884.

Tsygankov, Andrei P. 2019a. *Russia's Foreign Policy: Change and Continuity in National Identity*. Fifth Edition. Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield.

Tsygankov, Andrei P. 2019b. *The Dark Double: US Media, Russia, and the Politics of Values*. Oxford, New York: Oxford University Press.

Левада-Центр. 2024. «Конфликт с Украиной: основные индикаторы, ответственность, поводы для беспокойства, угроза столкновения с НАТО и применения ядерного оружия» https://www.levada.ru/2024/07/04/konflikt-s-ukrainoj-osnovnye-indikatory-otvetstvennost-povody-dlya-bespokojstva-ugroza-stolknoveniya-s-nato-i-primeneniya-yadernogo-oruzhiya/.

Медведев, Дмитрий. 2008. «Послание Федеральному Собранию Российской Федерации» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://www.kremlin.ru/events/president/transcripts/messages/1968 .

Медведев, Дмитрий. 2011. “Послание Президента Федеральному Собранию.” Президент России. Accessed May 11, 2026. http://www.kremlin.ru/events/president/transcripts/messages/14088 .

Путин, Владимир. 2000. «Послание Федеральному Собранию Российской Федерации» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://www.kremlin.ru/events/president/transcripts/21480 .

Путин, Владимир. 2005. «Послание Федеральному Собранию Российской Федерации» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://kremlin.ru/events/president/transcripts/22931 .

Путин, Владимир. 2007a. «Послание Федеральному Собранию Российской Федерации» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://www.kremlin.ru/events/president/transcripts/24203 .

Путин, Владимир. 2007b. «Выступление и дискуссия на Мюнхенской конференции по вопросам политики безопасности» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://kremlin.ru/events/president/ transcripts/24034 .

Путин, Владимир. 2011. «Новый интеграционный проект для Евразии - будущее, которое рождается сегодня» Известия. 4 октября 2011 г.

Путин, Владимир. 2013. «Послание Президента Федеральному Собранию» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://www.kremlin.ru/events/president/transcripts/messages/19825 .

Путин, Владимир. 2014a. «Послание Президента Федеральному Собранию» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://kremlin.ru/events/president/news/47173/ .

Путин, Владимир. 2014b. «Обращение Президента Российской Федерации» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://kremlin.ru/events/president/news/20603 .

Путин, Владимир. 2018. «Послание Президента Федеральному Собранию» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://www.kremlin.ru/events/president/news/56957 .

Путин, Владимир. 2019. «Послание Президента Федеральному Собранию» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://kremlin.ru/events/president/news/47173 .

Путин, Владимир. 2022. «Обращение Президента Российской Федерации» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://kremlin.ru/events/president/news/67828 .

Путин, Владимир. 2023. «Послание Президента Федеральному Собранию» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://kremlin.ru/events/president/news/70565 .

СНБ РФ. 2015. «Стратегия национальной безопасности Российской Федерации» Президент России. Accessed May 11, 2026. http://static.kremlin.ru/media/acts/files/0001201512310038.pdf .

Сурков, Владислав. 2006. «Суверенитет – это политический синоним конкурентоспособности» Accessed May 11, 2026. https://web.archive.org/web/20060418035317/http://www.edinros.ru/news.html?id=111148

Третьяков, Виталий. 2005. «О политической философии Владимира Путина» Российской газета. 28 апреля 2005 г. Accessed May 11, 2026. https://rg.ru/2005/04/28/tretyakov.html .